

Nagoya Citizens' Orchestra

The 90th Concert

名古屋市民管弦楽団 第90回定期演奏会

Conductor : Takeshi Ooi

指揮 : 大井 剛史

Piano Solo : Yuki Osaki

ピアノ独奏 : 大崎 由貴

2025.2.9(Sun)

愛知県芸術劇場コンサートホール

後援 : 愛知県、名古屋市教育委員会

プログラム

Program

バーンスタイン
Leonard Bernstein

「キャンディード」序曲
Overture to “Candide”

ガーシュウィン
George Gershwin

ラプソディ・イン・ブルー
Rhapsody in Blue

休憩

コープランド
Aaron Copland

バレエ組曲「アパラチアの春」
Appalachian Spring (Ballet Suite)

バーンスタイン
Leonard Bernstein

「ウエスト・サイド・ストーリー」より
シンフォニック・ダンス
Symphonic Dances from “West Side Story”

1. プロローグ (Prologue)
2. サムホエア (Somewhere)
3. スケルツォ (Scherzo)
4. マンボ (Mambo)
5. チャチャ (Cha-Cha)
6. 出会いの場面 (Meeting Scene)
7. クール～フーガ (Cool ~ Fugue)
8. 乱闘 (Rumble)
9. フィナーレ (Finale)

演奏会をお楽しみいただくために

- ♪ 演奏中に携帯電話や時計のアラームが鳴らないよう、必ず電源をお切りください。
- ♪ ビニール袋や手荷物など、演奏中に物音がたたないようにご配慮ください。
- ♪ 演奏中の私語はご遠慮ください。

プロフィール

Profile



指揮 **大井 剛史**
Takeshi Ooi

2024年4月、東京佼成ウインドオーケストラ常任指揮者に就任。
17歳より指揮法を松尾葉子氏に師事。東京藝術大学指揮科を卒業後、同大学院指揮専攻修了。若杉弘、岩城宏之の各氏に指導を受ける。1996年安宅賞受賞。スイス、イタリア各地の夏期講習会においてレヴァイン、マズア、ジェルメッティ、クラブチェフスキーの各氏に指導を受ける。

2007～2009年チェコ・フィルハーモニー管弦楽団で研修。2008年アントニオ・ペドロッチ国際指揮者コンクールで第2位入賞。在学中より東京二期会、新国立劇場などのオペラ公演で副指揮者をつとめ、2002年「ペレアスとメリザンド」(ドビュッシー)を指揮してデビュー。その後はオペラのほかバレエ、ミュージカル、日本舞踊との共演など多くの舞台公演を指揮。

仙台フィルハーモニー管弦楽団副指揮者(2000～2001)、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉(現・千葉交響楽団)常任指揮者(2009～2016)、山形交響楽団指揮者(2009～2013)、同正指揮者(2013～2017)、東京佼成ウインドオーケストラ正指揮者(2014～2024)を歴任。このほか全国の主要オーケストラを指揮している。

レパートリーは極めて広く、オーソドックスな管弦楽／吹奏楽の作品を中心として、現代音楽の初演、ゲーム音楽、映画音楽、ポップスなどありとあらゆる音楽を手がける。トーク付きのコンサート、また子供のためのコンサートなどを通じて、より多くの方々に音楽に親しんでいただくことに情熱を注いでいる。

東京藝術大学音楽学部器楽科非常勤講師(吹奏楽)、尚美ミュージックカレッジ専門学校客員教授。



ピアノ
独奏 **大崎 由貴**
Yuki Osaki

広島市出身。

第18回東京音楽コンクールピアノ部門第2位(最高位)。

ピアニストのイーヴォ・ポゴレリチ氏が審査員長を務める第4回マンハッタン国際音楽コンクールにて、特別金賞を受賞。

ソリストとして、東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、群馬交響楽団、大阪交響楽団、広島交響楽団と共演を重ねる。

バロックから近現代に渡るまで幅広いレパートリーを持ち、多数のソロリサイタルの他、弦楽器や管楽器奏者とのアンサンブルも精力的に行う。

広島大学附属高等学校卒業。東京藝術大学音楽学部をアカンサス音楽賞、藝大クラヴィーア賞、同声会賞を受賞し卒業。

令和2年度文化庁新進芸術家海外研修員として、ザルツブルク・モーツァルテウム大学修士課程を満場一致の最高点で首席卒業後、同大学ポストグラデュエート課程修了。

2022年度より東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校にて、2024年度より愛知県立芸術大学ピアノコースにて非常勤講師を務める。

Official website : <https://www.yukiosakipianist.com>

曲目解説 Program Notes

バーンスタイン／「キャンディード」序曲

舞台演劇『キャンディード』はヴォルテールの小説を題材とした作品であり、劇中の音楽を手掛けたのがレナード・バーンスタインである。現在は序曲が単体として演奏される機会が多く、オーケストラだけでなく吹奏楽でも幅広く楽しまれている。テレビ朝日『題名のない音楽会』では、佐渡裕が司会を務めていた時期に番組テーマ曲としても使われており、聞き覚えのある方も多いのではないだろうか。

目の覚めるようなティンパニの一打を皮切りに、金管楽器の華やかなファンファーレが物語の幕開けを知らせ、一気に聴衆の高揚感を煽る。畳みかけるようなテンポで躍動感のある主題は、楽天主義な主人公キャンディードの波乱万丈な物語を想起させるものである。木管楽器による軽快なソロの掛け合いのあとは、愛する女性クネゴンデとの愛を歌った二重唱の主題が、7拍子に乗せて流れるように奏でられ、ハーモニーの厚みを増しながら盛り上がりを迎える。これらの主題が繰り返されたのち、クネゴンデが自らの人生の不遇を嘆きつつも、華やかに着飾って前向きに生きることを宣言する煌びやかなアリアの旋律を受け、さらに加速しながら颯爽と終結部を迎える。

(H.T)

ガーシュウィン／ラブソディ・イン・ブルー

ジョージ・ガーシュウィンは、ニューヨークの喧噪の中で友達と喧嘩に明け暮れる平凡な悪ガキであった。家族には将来はギャングになると思われていたほどである。しかし彼は、ピアノとの出会いをきっかけに音楽の世界にのめり込んだ。音楽はワルを真面目な良い子にし、ガーシュウィンは瞬く間に売れっ子ピアニスト・作曲家としてのキャリアを駆け上がることとなる。

多忙な日々を過ごす中、彼はニューヨークで人気のバンドリーダー、ポール・ホワイトマンから、コンサートの呼び物になるような曲を書く依頼を受ける。それは「現代音楽の実験」と題するコンサートで、それまで粗野で未完成な音楽だと思われていたジャズの魅力を、クラシックの力を借りて人々に届けることが目的だった。しかし、多忙であったガーシュウィンは、気乗りしない返事をした。するとホワイトマンは、その演奏会のためにガーシュウィンが曲を書くということを新聞で先に報道し、半ば強制的に約束を取り付けた。作戦は大成功！ラブソディ・イン・ブルーのお陰で、演奏会は大変な熱狂に包まれた。

曲は、クラリネットのグリッサンドと共に幕開け、主題が提示される。当初はグリッサンドではなく17連符が書かれており、演奏者がお遊びでグリッサンドをしていたところ、ガーシュウィンが気に入り、採用されたという。(クラリネットはグリッサンドを演奏するための構造をしておらず、今日のクラリネット奏者の悩みの種となっている。)

メロディはトランペットのソロへ、続いて管楽器のtuttiへ、ピアノの独奏へと受け継がれる。その後は、オーケストラとピアノがメロディを受け渡し合いながら、曲が進行していく。

この曲の大きな特徴は、様々なジャズの要素だ。旋律には、物憂い雰囲気演出する「ブルース」の音階や、シンコペーションが印象的な「ラグタイム」のリズムが各所にちりばめられており、シンフォニックでありつつも自由な雰囲気が感じられる。

他には、オーケストラでは珍しいサキソフォンの存在や、トランペット・トロンボーンのwha-whaという音が鳴るミュート（消音器）などもジャズらしい。

ガーシュウィンは、これらのジャズの要素を見事にクラシックと融合させることで、「シンフォニック・ジャズ」とも呼ばれる新たな音楽を確立した。その働きにより、多くのクラシックファンがジャズの魅力を発見し、また多くのジャズファンがクラシックに魅了されたことだろう。

(ワウワウミュート)

<参考文献>

アメリカン・ラブソディ～ガーシュウィンの生涯～ ポール・クレシュ 晶文社

ガーシュウィン イーアンウッド ヤマハミュージックメディア

Rhapsody in Blue: An Icon of Jazz and American Culture Abigail Emmert

コープランド／バレエ組曲「アパラチアの春」

『アパラチアの春』は、アメリカの作曲家アーロン・コープランド（1900～1990）の代表作である。アメリカ開拓時代の質素な暮らしを描いた本作品は、アメリカ・モダン・ダンスの地位を築いた舞踏家・振付師のマーサ・グラハムと共同でバレエ音楽として創作された。第二次世界大戦中に発表され、1944年に音楽部門でピューリッツァー賞を受賞している。

物語の舞台は19世紀前半のアパラチア高原のとある村にて、花嫁が嫁ぎ先の村に辿り着く場面からスタートする。新しい家を建てた花婿が花嫁を迎え、結婚式を控えている。しかし、見知らぬ土地に嫁いだ花嫁は不安を隠せない。そのような状況の中、牧師や村人たちは二人を訪問し祝福する。花嫁の不安や緊張も次第に解きほぐれていき、愛し合う二人は神に感謝をした。

オーケストラの組曲は8つの部分に分けられ、コープランドはそれぞれの部分を以下のように描写している。

- 1: Very slowly 非常にゆっくり。光に覆われた中で登場人物が紹介される。
- 2: Allegro 速く。突然イ長調の弦楽重奏のアルペジオが飛び出し動き始める。高揚と厳正さの双方の感情。
- 3: Moderato 花嫁とその婚約者のための二重奏。優しさと情熱の場面。
- 4: Fast 素朴な雰囲気。スクウェアダンスの暗示と地元のヴァイオリン弾きたち。
- 5: Allegro 花嫁が一人で踊る。母性の予感。最高の喜び、恐れ、驚き。
- 6: Meno mosso 非常にゆっくり。冒頭の音楽の追想による移行の場面。
- 7: Doppio movimento シェーカー教徒の讃美歌による変奏曲。花嫁と農夫の夫による日々の仕事の場面。シェーカー派の主題の変奏曲が5つ登場する。最初にソロ・クラリネットにより演奏されるこの主題は、エドワード・D・アンドリュースによって集められ、「The Gift to be Simple」の題で刊行されたシェーカー派の音楽の中から引用されている。このメロディは、「シンプル・ギフト」と呼ばれる。
- 8: Moderato: Coda 花嫁はいつも隣人に囲まれている。最後に夫婦は、新しい家で静かに力強く生きるという希望を抱く。ミュートのかかった弦楽器が、静かな祈りのようなコラールの一説を詠唱し、冒頭の音楽の追想で幕が閉じられる。

曲目の舞台、アパラチア地方はニューヨーク州からアラバマ州まで広がる、凹凸が激しい自然豊かな丘陵地帯である。移民が東海岸に移住をしてから約150年後、開拓時代の終わりごろに到達した人々によって自然に囲まれた地域で独自の文化が発展した。

全体を通して協和音に溢れており、加えて音域を広く使用している本作品はアメリカの自然豊かな大草原を喚起させ、変拍子を多用した途中展開は自然の生命力を感じさせる。また、曲の一部にキリスト教の一派であるシェーカー教徒の讃美歌『シンプル・ギフト（質素な贈り物）』を引用しており、敬虔な教徒を思わせる場面もある。

純朴でありながらエネルギッシュな一面も持ち合わせる。そのようなアパラチアの農村風景を感じていただければ幸いである。

(アメリカ行ってみたい)

<参考文献>

- G・レヴィン（2003）『アーロン・コープランドのアメリカ』東信堂
- 谷口昭弘（2020-7-14）「アメリカ開拓民の暮らしを描き、大戦中に発表されたバレエの傑作《アパラチアの春》」
ONTOMO. <https://ontomo-mag.com/article/column/appalachian-spring-20200713/>, (2024-11-5参照)
- 伊藤宏一（2016）「Aaron Copland: Appalachian Spring, Suite」さわかみオペラ芸術新興財団。
<https://www.sawakami-opera.org/wp/classics/aaron-coplandappalachian-spring-suite>, (2024-10-29参照)
- 国務省「米国の地理の概要-アパラチアとオザーク山地」AMERICAN CENTER JAPAN.
<https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/3515/>, (2024-11-5参照)

バーンスタイン／「ウエスト・サイド・ストーリー」よりシンフォニック・ダンス

「レナード・バーンスタイン」

20世紀を代表する偉大な音楽家であるレナード・バーンスタイン（1918～1990）は、ハーバード大学卒業後カーティス音楽院で学び、1943年に発表した交響曲第1番「エレミア」によって新進作曲家として脚光をあびた。同年、ニューヨーク・フィルハーモニックの副指揮者としてブルーノ・ワルターの代役を務めセンセーショナルな成功を収めた。その後1957年にニューヨーク・フィルハーモニックの音楽監督に就任し、アメリカ楽壇を象徴する存在となり、ヨーロッパでも圧倒的な名声を獲得した。指揮者としてだけでなく作曲家、ピアニスト、教育家、また平和運動家としても精力的に活動した。

「ウエスト・サイド・ストーリー」

バーンスタインはクラシック音楽の他に、ミュージカル、ジャズ、映画音楽など多様なジャンルで作曲を行い、初期はブロードウェイミュージカルで音楽活動の基盤を築いた。「ウエスト・サイド・ストーリー」は、シェークスピアの「ロミオとジュリエット」を当時のニューヨーク・マンハッタンに場面を移し、社会問題となっていたプエルトリコ移民と白人不良グループの対立や、2つのグループの若い男女の恋と対立から生まれる悲劇として、物語は描かれている。

1957年にブロードウェイで初演されると、これまでに無い新しいミュージカルとして高い評価を受け上演1000回を超えるロングランとなった。1961年には映画化され、アカデミー賞では10部門を受賞し、全世界で大ヒット作となっている。2021年にはスピルバーグ監督によりリメイクされ話題を呼んだ。

「シンフォニック・ダンス」

ミュージカルとしての評価も確かなものとなった1960年、バーンスタインは「ウエスト・サイド・ストーリー」の中のダンスナンバーを中心に演奏会用組曲を作り、「シンフォニック・ダンス」と名付けた。

様々なバレエやダンスの躍動感、リズムカルな要素があふれ、ジャズ、ラテン、またクラシカルな要素が織り込まれ、バーンスタインのジャンルを超えた独創的な作曲スタイルや豊かな音楽表現が存分に表れている。

曲は切れ目なく演奏されるが曲の冒頭と最後以外はミュージカルの進行とは異なる。バーンスタインの代表作ともなっている。

1. プロローグ (Prologue)

2つの不良グループ、ジェッツとシャークスの対立が喧嘩騒ぎとなる
アルトサクソとフィンガースナップ（指パッチン）が印象的

2. サムホエア (Somewhere)

許されない恋に落ちたトニーとマリアが希望と祈りを込めて歌う
物語全体の核となる曲

3. スケルツォ (Scherzo)

対立の無い夢の世界
テンポを少し上げ変拍子の多い軽快なスケルツォ

4. マンボ (Mambo)

体育館でダンスにより両グループが競い合う
キューバを起源とするダンス音楽、ブラス、
ドラムス等打楽器が大活躍
リズムに乗って ♪♪ マンボ！！ ♪♪

5. チャチャ (Cha-Cha)

トニーとマリアが初めて踊る

6. 出会いの場面 (Meeting Scene)

トニーとマリアが言葉を交わし、互いに恋に落ちる

7. クール～フーガ (Cool～Fugue)

いきりたっているジェッツのメンバーに、落ち着け、冷静になれ！
ジャズ、スウィング、フーガが見事に融合された音楽

8. 乱闘 (Rumble)

両グループの決闘シーン、緊迫感に満ちている、そしてついに悲劇となる

9. フィナーレ (Finale)

兄を殺されながらもトニーへの愛を切々と歌うマリア
そして終末、トニーも銃で撃たれ絶命するがマリアは生き残り、
音楽はサムホエアを奏でながら静かに終わる

(WEST SIDE STORY 1961)

(N.K)

私たちと一緒に音楽を楽しみませんか？

団員募集

本楽団は音楽を愛するアマチュアの集まりです。
オーケストラの一層の充実を図るため、団員を募集します。

定期オーディションのお知らせ

- ♪ 募集パート／弦楽器全パート（コントラバスは楽器貸出し可）、トランペット
- ♪ 応募条件／年齢15歳以上。毎週練習に参加できる方。居住地不問。
- ♪ エントリー・お問合せ先／名古屋市民管弦楽団ホームページ <https://www.nco.jp/>
- ♪ エントリー締切／2025年3月15日（土）
- ♪ オーディション日程／2025年3月22日（土）名古屋市内にて
*日程が合わない場合は調整可能です。
- ♪ オーディション方法／スケール、課題曲・パートによっては追加で自由曲、面接（10分程度）

ホームページ



当団の活動について

- ♪ 練習日／主に毎週土曜日
＜月1回程度で日曜日の臨時練習有り、詳しくはホームページの練習予定をご覧ください＞
- ♪ 練習場所／生協生活文化会館（名古屋市千種区）、東海市芸術劇場等
＜詳しくはホームページの練習予定をご覧ください＞
- ♪ 団費／月2,000円他（*2025年2月現在）

※練習見学は随時受け付けています。お気軽にお問い合わせください。
※SNSでも情報発信しています。

Facebook



@nagoyacitizensorchestra

Instagram



X(旧Twitter)



@Nagoya_c_orch

次回演奏会のお知らせ

第91回定期演奏会
2025年8月17日（日）

指揮：寺岡 清高

チャイコフスキー：交響曲第6番「悲愴」

プロコフィエフ：組曲「3つのオレンジへの恋」

ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲

愛知県芸術劇場コンサートホール